

予備役ブルーリボンの会の活動に招待されて

吉田 靖 陸自59

はじめに

「予備役ブルーリボンの会」という民間団体がある。予備自衛官や元自衛官がメンバーで、北朝鮮による日本人拉致被害者救出のために貢献することを目指すとして2008年に設立され、現在も、失踪場所の現地調査やシンポジウムの開催など、精力的に活動を続けていく。

筆者は、同会の最初のシンポジウム「第1回 拉致と国防に関するシンポジウム」(2009年12月6日)に招待されたことがあった。

もう10年以上も前の事ではあるが、今年6月に「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」の代表だった横田滋氏が亡くなったこともあり、拉致問題について真摯に取り組んでいるこの民間団体について、往時を振り返りつつ紹介したい。

シンポジウム会場にて

予備役ブルーリボンの会の第1回シンポジウムは、港区の浜離宮公園に隣接する「ゆうらいふセンター」で、約

300名の予備自衛官等が参加して開催された。

シンポジウムの開始に先立ち、葛城奈海予備陸士長の案内で招待者席に着いた。

葛城氏は東京大学農学部卒業、女優、TBSラジオのレギュラーアナウンサー及び日本文化テレビキャスターの肩書を持ち、合気道五段、鹿島神流中伝の武道愛好者でもある。

「これから私は本会の総司会を担当致しますので、失礼させていただきます」と丁寧にお辞儀し、彼女は去った。

会場を見渡すと、一度は自衛隊の制服に袖を通したところのある人々の熱気で沸いている。筆者は陸上自衛隊第1普通科連隊第2中隊に勤務していた

時、2回、予備自衛官の教育を担当したことがある。彼らは主に企業に勤め、夏の2週間だけ連隊の各中隊に起居して訓練していた。

当時のことを思い出していると、「吉田さん」と木本あきら予備一等陸曹が声をかけてきた。彼はいま、拓殖大学客員教授(国際関係論)で教鞭をとる傍ら、本会の幹事を務めている。彼も筆者と共に陸上自衛隊第1空挺団で勤務した仲間で、今回の招待も彼のご尽力による。当時の彼は激しく厳しい隊勤務の終了後に大学の夜学に通学して卒業、「予備自衛官となる条件」で富

士重工と三菱重工に出仕した。中東、北アフリカ、中南米、インドネシアの数十個所のプラントでエンジニアとして勤務の間も、毎年の予備自衛官招集訓練は皆勤であった。マスコミで拉致事件が報道される前のことであるが、彼自身、某武装集団に誘拐された経験を持つている。

パネルディスカッション

葛城氏の司会で、パネルディスカッションの弁士、櫻井よしこ氏、田母神俊雄氏、矢野義昭氏及び荒木和博氏(予備役ブルーリボンの会代表)が紹介された。以下、それぞれの弁士の話の要旨を紹介する。

(1) 櫻井よしこ氏

国家の基本は外交プラス軍事である。日本の外交はおかしいし、軍事力も法的及び物理的に整備されていない。今のままでは、海岸線、島嶼、国土、つまり国を守れない。それぞれどこか、民主党が政権を握り、「自衛隊を減らす」「軍事費を減らす」と言い出している。鳩山総理の言う「友愛」で国際社会は動かないし、拉致問題も解決できない。経済的な圧力と軍事的な圧力が求められ、米国、中国及び韓国にも、「日本という国は無視できない」と真剣に思わせることが必要である。

(2) 田母神俊雄氏

冒頭、「本日は北朝鮮に拉致された被害者の救出について皆様と考える。本会合は、例えば、横田めぐみさんがかわいそうだ云々の列挙を皆様が発言していただく会ではない」という檄が飛んだ。

日本人が拉致された問題を、外国に、「助けてくれ！」とは言えない。日本の自衛隊が動かないときに、米軍が助けてくれるわけがない。「自衛隊の投入は避けるべきだ」と言っている限り、解決は難しい。救出の覚悟が希薄な日本国政府！これだけ多くの日本人が拉致されているのは、日本国に対する侵略だ！日本国政府は6カ国協議などで救出に努めているふりをしてい

る。政府は自衛隊に対し、「救出の準備をせよ！」と命ずるべきである。救出のための情報収集と訓練を始めることで、北朝鮮が交渉に応じる可能性が出てくるであろう。

(3) 矢野義昭氏(当時、予備役ブルーリボンの会副代表)

○北朝鮮の軍事力(括弧内は日本国)だが、軍事費対GDPは30%(0.9%)、正規軍人員は117万人(23万人)、正規軍人員対人口は6%(0.2%)、予備等も含めた動員可能の軍人数937万人(26万人)である。○列国の領域警備は、軍または準軍隊

が担当している。日本国の領域警備は、警備事案が起ると、海上自衛隊は海上保安庁に通報するのみで、一義的な対処はできない。その事態が、同行の能力を超え、対処できない場合は、海上自衛隊等がこれに当たるのが、現行の法である。

特殊な訓練を受けた北朝鮮の工作員が武装工作船に乗り込んでいる場合、その能力は軍用艇と同等になる。その工作船に対して、海上保安庁の船だけでは対応が難しい場合が予想される。諸外国並みの領域警備の権限が、自衛隊に与えられることが望ましい。

○日本国はスパイ防止法がない。平成11(1999)年の不審船(自沈)事件は、「漁業法」違反で対応。国内に

いる怪しい不審者は、「出入国管理法」違反等、現行の法で裁かれ、罰則も軽い。(4) 荒木和博氏
日本国政府には、約30人からなる拉致問題対策本部事務局があるが、ボスター作りやテレビ等のPR活動を主に

行っている。「日本国の憲法・法律がこうであったから皆様を救出できなかった」という言い訳は通用しない。憲法の改正には長い年月を必要とする。我々には、「今なすべきこと」が求められている。その「なすべきこと」の活動に当たって、現職の自衛官は

多々制約を受けるので、我々予備自衛官が彼らに代わって活動するために、本会が設立された。会員でできることは、すべて実行しよう！

拉致被害者の救出法

パネルディスカッション終了後、拉致被害者の救出法について、講演聴講者の自由発言のセッションがあった。代表的な意見を紹介する。

(1) 北朝鮮に潜入者を派遣
「拉致被害者を救出するには、その任に当たる者を北朝鮮に潜入させることが必要である」旨の発言があったが、「変装して拉致被害者の救出のために潜入する希望者」について、挙手をするよう求めたところ、希望者は皆無であった。

(2) 救出の時機
最近、北朝鮮はデノミを行った。これは国家経済が困窮している証左であり、国家が混乱している時こそ、拉致被害者の救出の好機である。

(3) 高速艇で救出
拉致被害者を北朝鮮東岸の某地点に集結させ、そこに高速艇を待機させ、迅速に救出する。
(4) 北朝鮮へ向けての電波の発信
○拉致被害者への激励の電波を発信
○金正日に向け、「金正日総書記に告ぐ！我々はかつて大國アメリカに

対して特攻機まで繰り出して戦った国である。日本人を怒らせるとどうなるか分かっているであろう。拉致被害者をすぐ返しなさい。もしそうしないと重大な結果を招く」と警告する。

○朝鮮人民軍総参謀長の呉克烈(オ・グンニョル)に向け、「呉閣下！貴方と同じように私どもも軍人として国を愛し、軍を愛しております。これから次の時代になったとき、ぜひ協力していきましょう」と呼びかける。

あとがき

「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」の会員の高齢化が進む中、拉致問題の解決は時間との戦いとなってきた。その中で、予備役ブルーリボンの会という団体が、現在もお精神的に拉致問題の解決に向けて活動をしていることを読者諸兄に知ってもらいたいと思ひ、10年以上も前の体験を紹介させていただいた。これからも、この問題を風化させることなく、「予備役ブルーリボンの会」のみならず、国民的な運動となつて、解決に向けての機運が高まることを心から祈りたい。



R B R A

予備役ブルーリボンの会
The Recruits' Blue Ribbon Association